

岐阜県立飛騨高山高等学校

「いつか見たあかね空」

大田清隆 作

登場人物

前田明日香	女子高校生
ママ	喫茶店のママ
大谷隆昭	喫茶店の常連客・小説家志望
斎藤夏実	定食屋店員
上野小春	花屋の店主
阪本冬真	サラリーマン
響	明日香の同級生
朝日	〃
千晃	〃
早苗	小春の友人
知里	〃

【シーン一】

喫茶店 夏の始めころ、ミンミン蝉が鳴いている午後。
ママがカウンターの所で仕事をしている。隆昭登場

隆昭 ふー、暑い、暑い。

ママ いらつしやい。

隆昭 ママ、いつもの。

ママ ずいぶん暑そうね。

隆昭 今日の暑さは半端じゃないよ。こー暑いと、さつさとシャワーを浴びて、ビールでも飲みたくなっちゃうよ。

ママ また、お酒？まだ日が高いじゃない。今日、少しは「お仕事」なさったの？

隆昭 お仕事って、照れるなあ？

ママ だって、先生は「小説家」でしょ。小説を「お書きになる」のが仕事じゃない。

隆昭 (嬉しそうに) 小説家だなんて、ママ、お世辞言わないでくれよ。まだ、小説で食ってるわけじゃないんだから。

ママ そんな中途半端なお気持ちだから、いつまでたってもうだつが上がらないんじゃない。

隆昭 (ムツとする) ……。

ママ あら、気に障った？ ごめんなさいね。私って思ったことをつい言っちゃうものだから。

隆昭 そんなじゃないよ。

ママ 嘘！ちゃんと顔に書いてあるわよ。でも、私はいつも先生を応援しているわ。それはわかってね。

隆昭 ……そんなこと、わかってる。

ママ だったら、頑張ってるね。ほんとに応援してるから。ほんとよ。でもな、この暑さだ。家にはエアコンもないし、熱中症にな

りそうだ。これじゃ、脳みそが干上がっちゃって、アイディアも浮かばない。

ママ アイディアも浮かばないって、それはいつもじゃない。

隆昭 ……応援してるっていうけど、足を引っ張られている気分になるよ。

ママ えへ、ごめんなさい。私ってこういう性格だから……。

夏実 登場。テーブル席に着く。

ママ いらつしやい。

夏実 こんにちは。今日も暑いですね。アイスコーヒー、お願いします。

ママ 遅かったじゃない。やっと昼休み？

夏実 そう。結構ランチタイム忙しくて、いつまでもお客が絶えなくて、

大変ね。

小春登場

小春 こんにちは。あれ、夏実さん。お仕事は？

夏実 今、アイドルタイムです。

小春 そう、遅い休憩ね。飲食店は大変だ。

ママ それに比べて……？

小春 花屋は楽だって言いたいの？

隆昭 経営者は時間に縛られないからね。

小春 何それ。(夏実と同じテーブルに着いて) 私もアイスコーヒー。

隆昭 先生だって、ねえ。

ママが注文の品を運ぶ

小春　ところで、この間来てたアルバイトの子、どうしたの？

夏実　そういうえば、全然見ないですね。

ママ　……、ああ、あの子ね。他に時給のいいバイトがあったみたい。一週間でやめちゃったわ。

夏実　一週間！？まったたく、最近の若い子ときたら。

小春　おぼんくさつ……。若いくせに。

夏実　その表現もおぼんくさいですよ。

小春　何言ってるのよ。

ママ　できれば、いい子いない？私一人だと、なかなか大変で。(カウンスターに戻る)

小春　そうなんだあ。確かに私の店もアルバイトがいてくれるから、私もこうして息抜きができるからね。

隆昭　息抜きばかりだけだね。(みんなに無視される)

小春　だから表の張り紙？

ママ　気が付いた？今朝から張ってみたの。

小春　(夏実に)あなたどう？いつそのこと、バイト替えててみたら。

夏実　バイトでもパートでも長年やっていると、いろいろあるんですよ。小春さんもわかっていくくせに。

小春　そこをなんとかならないの？

夏実　無理ですよ。

隆昭　(ママに)実はこんど文学賞の作品募集があつてね……。

明日香登場

ママ　いらつしやいませ。

明日香　あの……。

ママ　奥の席が空いてますから、どうぞ。

明日香　は、はい。(席に着く)

ママ　(水とおしぼりとメニュー)どうぞ、決まったら声かけてくださいね。

明日香　(しばらくメニューを見ている)

ママ　(明日香の様子をちらちら見る)

小春　ねえ、あなた、時給いくらでやってんだっけ？

夏実　八百円ですけど。

小春　ここ九百円で書いてあったよ。(ママに)ねえ。

ママ　でも、そんなの、引き抜いたみたいでいやだわ。(近所だし、入選すると賞金百万円なんだよね。)

隆昭　ママがそういうんじや、残念だけど、あきらめる？

小春　どっちが経営者？

夏実　あのさあ……。

隆昭　(明日香に)お決まりですか？

ママ　……アイステイをお願いします。

明日香　承知いたしました。(アイステイを作る)

ママ　客たちの雑談

ママ　お待たせしました。

明日香　(思い切つて)あの、お店の前の張り紙なんですけど……。

ママ　ええ？

夏実　ひよつとしてアルバイト希望？

明日香　……。

ママ　そうなの？

明日香　(うなずく)

夏実　ママ！よかつたじゃないですか。(顔を曇らせる小春)

ママ　(笑顔で)そう、じゃあちよつと待つてて。

明日香　あなたは高校生？

ママ　(うなずく)

明日香　今は夏休みよね。

ママ

ママ

明日香 (うなずく)

ママ 高校は？

明日香 ……不知火高校、です。

隆昭 不知火高校!?

夏実 超進学校じゃない!

小春 そんな子が、なんでまた……。

夏実 どうして、バイトしようと思ったの？

明日香 それは……。

隆昭 勉強、大丈夫なの？

ママ (隆昭に) それはあなたには関係ないこと。(明日香に) 勉強大変なんでしょう。

明日香 (あいまいにうなずく)

ママ まあ、人にはそれぞれ事情つてものがあるから、深くは聞かないわ。で、バイトは夏休みだけ？

明日香 ……。

ママ そうよね、急に先のこと言われても、困るわよね。

明日香 ……。

ママ とりあえず、夏休みやってみて、考えればいいわ。

明日香 (少し驚いて) あ、ありがとうございます。

隆昭 ママ、そんなに簡単に……。

ママ (にらむ)

隆昭 (近くの雑誌か新聞を手取る)

ママ じゃあ、生徒証出して。(出す) 不知火高校二年、前田明日香さんね。

明日香 はい。

ママ いい名前ね。じゃあ、この書類に連絡先とか必要事項を書いて。(明日香書類を書く)

小春 うちの近所に不知火高校に通っている子がいるけど、帰り

も遅いし、土日も塾通いで大変みたい。

夏実 へー、そんなに勉強してるんですか。

小春 なんだって超有名国立大学に、毎年、何十人も入学してるんだから。

夏実 勉強漬けの高校生活かあ……。

小春 夏休みも、補習と塾でたいへんみたい。

夏実 へー。

明日香 (カウンターへ) こ、これでいいですか。

ママ うん、大丈夫。で、いつから来られる？

明日香 ……いつからでも、大丈夫です。

ママ じゃあ、明日八時までに来てくれる。

明日香 あ、はい、わかりました。(財布を出す)

ママ あっ、今日はいいわ、サービス。

明日香 あ、ありがとうございます。(退場)

小春 ねえ、ママ、あの子、大丈夫？

夏実 なんか、暗そう。

ママ そんなことないわよ。初めてで緊張しているだけよ。字もきちんとしていたし。

隆昭 ママ、ほんとにそう思うの？

ママ もちろん、どうして？

夏実 あんなんで、接客できるのかしら。

小春 それにしても、不知火高校かあ。なんか訳あり、って感じ。そうそう。

隆昭 だれでも最初から完璧にできるわけないわよ。

ママ そりゃ、そうだけけど。

夏実 この間、うちの店にもあんな感じの子が来て……。

小春 へー、そうなの？アルバイト？

夏実 ええ、なんか全然しゃべらないし、やりにくいなって。

小春 そうよね。

隆昭 で、どうなったの。

夏実 三日で黙って来なくなっちゃいました。

小春 あの子も、その口かも。

夏実 あ、もうこんな時間。二時過ぎちゃった。また、おかみさんに嫌味を言われちゃう。

小春 私もそろそろ帰ろうかな。四時にはバイトを帰さないといけないし。

夏実、小春立ち上がってレジへ

ママ どうも、ありがとう。

夏実・小春 ありがとう、ごちそうさま。

夏実、小春退場

隆昭 ところで、ほんとのところどうなんだ、あの子。

ママ さあ、まあ、猫の手よりはましだろうし、頭よさそうだからすぐに慣れるわよ。

隆昭 でも、なんで、この店に来たんだろう？

ママ 取りようによつては、ずいぶん失礼な言い方だけど。

隆昭 ごめん、ごめん。接客以外にもバイトはあるって意味。ところで、さっき言いかけてた話だけど……。

ママ 何だったかしら？

隆昭 めげるなあ、文学賞のことだよ。

ママ ああ、そういえば、何か言いかけてたわよね。

隆昭 あのさ、さっきはアイデアが浮かばないなんて言ったけど、実は、今度の文学賞に応募する作品を書いているんだ。

ママ そう。

隆昭 今まで何度も落選したけど、今度のテーマは自信がある。

ママ その言葉、何回も聞いたけど。

隆昭 今度こそ、ホントにホント。感動の純愛ラブストーリー。

ママ 純愛ラブストーリーね。で、どんなお話？

隆昭 簡単に言うと、些細なきっかけで思わず離婚してしまった

けど、実はお互いに心の底から愛し合っていた。そのことに気づいた二人は様々な障害を乗り越えて、再び結ばれる。

どこかにありそうな物語のような……。

大事なのは物語の展開の中で、読者を引き付けること。俺が今一番悩んでいるのは、その展開なんだ。一行ごとに魂を入れて書いているから、なかなか先へ筆をすすめることができない。

だから、毎日午後になるとここにきてる？

隆昭 失礼な。これこそ、産みの苦しみ。ママにはわかってほしいな。

ママ はいはい。完成を楽しみに待ってますよ。(テーブルの食器などを片付け始める)

隆昭 なんか、全然期待されてないみたい。

ママ そろそろ、店じまいよ。さあ、帰って、お仕事、お仕事。

隆昭 ねえ、ママ、夕飯でも一緒にどう？

ママ いいわねえ。文学賞取れたら、ぜひみんなでお祝いさせて！

隆昭 じゃあ……、ごちそうさま、コーヒー代ここに置くね。さて、ビールでも飲もうかな。

ママ ありがとうございました。

隆昭 また、明日。

(暗転)

【シーン二】

(明転) 朝ママが掃除をしている。明日香登場

ママ いらっしやいま……、あら、おはよう、ちゃんとこれたわね。

明日香 お、おはようございます。

ママ ちゃんと、あいさつできるじゃない、感心、感心。

明日香 あの……。

ママ このレベルでほめてちゃ逆に失礼か。でも、最近のバイトの子、あいさつもろくにできない子も多いから。これつけてね。(エプロン渡す)

明日香 よろしくお願いします。

ママ じゃあまず、フロアの掃除からお願いしますね。このテーブルの周りをお願い。(モップを渡す)

明日香 はい。(掃除を始める。ママはカウンターへ)

ママ (様子を見ながら) ねえ、おんなじとこばかり、やってないで、ちゃんと隅々までやってね。

明日香 は、はい、すみません。

ママ カバンここに置いておくわ。今度からここにおいてね。

明日香 はい。

ママ 今までもこういうバイトしたことあるの？

明日香 い、いえ、初めてです。

ママ でしょうね。(独り言のように) まあ、私も似たようなもんだったかも。

明日香 えっ。

ママ いえ、なんでもないわ。終わったらテーブル拭いてね。

明日香 は、はい。

ママ テーブル用の布巾はここに置いておくね。

明日香 は、はい。

ママ 向こうのテーブルもよろしくね。

明日香 は、はい。

ママ じゃあ、もうすぐ時間だから、表の看板、営業中にしてくれる。今日は初めてだから、カウンターの中はいいわ。接客の方をお願いします。緊張するかもしれないけど、うちは常連さん

が多いから、大丈夫よ。

明日香 は、はい。(下手に退場)

ママ (電話を掛ける) もしもし、私だけど、今日の注文いいかしら。(間) えーっと、コーヒー豆を三パックと、紅茶をひと缶、あとはミルクももらっとくわ。(間) うん、それでいいわ。なるべく早くお願い。

明日香 看板、掛け替えました。

ママ 遅かったじゃない。(電話に向かって) じゃあ、よろしく。すみません。なかなか、看板、うまくかけられなくて……。

明日香 じゃあ、こっち来て。接客の基本を教えるからね。カウンターの座って、まず、これがメニュー……。

冬真登場(ネクタイ姿)

ママ いらっしやい。あれ、今日は日曜日なのにお仕事？

冬真 そうなんだよ。うちの会社人使いが荒くて、いきなり、今度の日曜日よろしくって、課長に言われてね。

ママ いきなりはつらいね。彼女とデートがありますから、無理です、って言えば。

冬真 それは無理。とても言える雰囲気じゃない。……それに、そもそも、彼女いないし……。

ママ それはそんな忙しい会社に勤めているからよ。社内がいい子いないの。

冬真 いませんよ。うちの会社の女性って、みんなお母さんくらいの年の、パートのおばちゃんだからね。

ママ 食品加工会社だったわよね。

冬真 零細企業は大変です。(席に着く)

明日香 い、いらっしやいませ。

冬真 あれ、あたらしいバイトの子？

ママ そう、今日から来てもらってるの。明日香ちゃんっていうの。

明日香 よ、よろしくお願いします。

冬真 いや、こちらこそよろしく。

ママ 早速、お冷とおしぼり、運んでくれる。

冬真 ママ、アイスコーヒー、お願い。

明日香もたつきながら運んでくる。震えながらグラスを置く。水をこぼしそうになる。

冬真 大丈夫？

明日香 すみません。

ママ 気をつけて。じゃあ、アイスコーヒーできたから、運んで。

明日香、カウンター越しに受け取ろうとして滑って落とす。グラスの割れる音

ママ ちよつと！

明日香 すみません。(カウンターの中に入って、掃除しようとする)

ママ 危ないから、入らないで。この上、けがでもされたら大変。

私がやるわ。(冬真に)冬真さん、こういうことですから、もう少し待ってくださいね。

冬真 いや、今日はいいいよ。取引先との約束まで、あんまり時間ないし、冷たい水だけでももらっていくよ。

ほんとにごめんなさいね。

ママ すみません。

明日香 小春とお客早苗、知里入場

小春とお客早苗、知里入場

ママ いらつしやいませ。

冬真 え、この水……、生ぬるいんだけど。

ママ ひよつとして、水道水出した？水も入れずに……。

明日香

ママ (無言)

冬真 (カウンター越しに冷水を出し)ごめん、これどうぞ。ありがたい。(立つたまま水を飲み)(ふー)じゃあ、行つてきます。(退場)

小春 (明日香を見て)なんか大変そうね。

ママ なんでもないわ。

小春 本当に？

ママ (カウンターの下を箒で掃きながら)今度は、ちゃんとやってね。

明日香 は、はい。

三人は席に座る

三人は席に座る

早苗 ねえ、今年の女子会どこにするの？

知里 毎年、九月の三連休の前だったわよね。

小春 連休になると、お彼岸が近いからお店休めないのよ。ごめんなさいね。

早苗 それはそうね。花屋さんだから。その前の金土日だと……。

知里 (手帳を見ながら)九月十日出発ね。

小春 それなら何とかなるわ。

早苗 明日、さっそく有給取らないと。

知里 あとは、場所ね。

早苗 去年の金沢、よかったわ。今年も日本海の海鮮丼、食べたい。あのね、今年は思い切って、沖繩ってどう？

小春 沖繩！

早苗 そう、実はパンフレットもらってきているの。(出す)

小春 ちよつと、遠いんじゃない。

知里 何言ってるの、羽田からひとつ飛びよ。

知里 (パンフレットを見ながら)いいわあ、青い海、青い空、エメラルドグリーン……。

小春 九月でも泳げるしね。

明日香 い、いらしゃいませ。(ぎこちなくグラスを配っていて、倒して水をテーブルにこぼしてしまう) す、すみません。

知里 ちよっと、しつかりしてよ。

小春 この子、今日が初めてなんだよ。大目に見てあげて。

早苗 いくら初めてといっても、ねえ……。

明日香 (小声で) ほんとに、すみません。

知里 謝るなら、もつとちゃんと、あやまりなさいよ。

明日香うつむいている。隆昭登場

ママ いらつしやい。

隆昭 (テーブルの方を見て) なんか、大変な場面に出くわしちゃったな。

ママ たいしたことないわ。何にする？

隆昭 アイスコーヒー。なんか大丈夫かな、彼女。

ママ 気になる？

隆昭 そりゃね、あの様子見てりや。

ママ はい、アイスコーヒー。

明日香 すみません、アイステイ二つとグレープフルーツジュース

一つお願いします。

ちゃん注文取れたじゃない。

隆昭 何とかね(笑)。

早苗 このプランなんかどう、結構リーズナブルだし。

知里 いいわね。ホテルも感じよさそう。

小春 じゃあ、九月の十日出発ということで、このツアーに申し込むわ。

あつという間に、現実化したわね。

早苗 今から、すごく楽しみ！

知里 まだ、決まったわけじゃないわ。

早苗 ねえ、電話番号があるから今電話して。

知里 そうそう、善は急げ、よ。

小春 幹事は私？

知里 そう、あなたは万年幹事。

小春 なんかも不公平だけど、まあいいわ。(ケータイで電話)

ママ (グラスを三つ出して) じゃあ、これをお客さんに出して。今度は気をつけてね。

明日香 はい。(小春たちの席へ)

小春 じゃあ、そういうことで、女性三名よろしくお願いします。(電話を切る)

明日香 お、お待たせしました。

小春 グレープフルーツジュースは私。後の二人はアイステイ。

明日香 はい。

小春 まず、私の頂戴。

明日香 あ、はい、どうぞ。(それぞれに配る、見守る隆昭とママ)

(フェード・アウト 暗転)

【シーン三】

(明転) 音響ヒグラスの声

一カ月後 明日香とママが並んでカウンターに、隆昭がカウンターの席に、明日香を見ている。夏実が下手のテーブル席で本を読んでいる。

隆昭 明日香ちゃんも、ずいぶんさまになってきたじゃない。

明日香 ありがとうございます。

隆昭 最初のころは、見ていられなかったよね。

明日香 恥ずかしい……。

ママ そろそろ夏休みも終わりよね。

明日香 はい……。

早苗

知里

小春

知里

小春

ママ

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

小春

明日香

ママ 学校が始まったって、土日とか来てくれる？

明日香 ……。

ママ ねえ、お願い。

明日香 来てもいいんですか？

ママ もちろん。あなたがいてくれて、ほんと、大助かり。

明日香 ありがとうございます。

ママ あ、やっとなんか笑ったね。

明日香 そうですか？

ママ あなたのそんな笑顔、初めてよ。

明日香 (微笑む)

隆昭 あの子、明日香ちゃんって、どんな進路希望？

ママ なによ、いきなり。

明日香 ……。

隆昭 この店に来て一カ月なんだけど、あんまり自分のことはなさないから。

ママ だからといって。(明日香に) あんまり、先生のいうこと、真面目に取らないでね。

隆昭 ひどいなあ。だって、こうやって話せるようになったんだからさあ……。喫茶店でバイト始めたのも、やっぱり夢に向か

って、貯金のため？

ママ ねえ、いい加減にしてくださいよ。

明日香 私にはないんです。今は……。

隆昭 ……、ないって？

明日香 夢。

隆昭 夢がないの？

明日香 ……。

隆昭 不知火高校なんて、超進学校に通っているのに。

明日香 (首を振る)

隆昭 今はってことは、前はあったってこと？

ママ 隆昭さん、あんまり、追い詰めないで。

隆昭 追い詰めてる？何で？

ママ 何でもいから。

隆昭 はいはい、わかりました。

ママ 問答無用よ。

隆昭 ママって、いつも強権的なんだから。

冬真登場

ママ いらつしやい。

冬真 アイスコーヒー、お願い。(夏実のテーブルへ)

明日香 (水とおしぼりとコーヒーを運ぶ) お待たせしました。

冬真 あ、明日香ちゃん。ずいぶんと慣れてきたね。

明日香 ありがとうございます。

夏実 声もしつかり出せるようになってきたし……。

冬真 これもママの教育のおかげだよ。わが社の教育係にどうですか？

ママ え、いやよ。どうせお給料も安いんでしょ。

隆昭 (冬真に) 俺のこともほめてほしいな。

明日香 (振り向いて) ありがとうございます。

夏実 そのお礼は誰に向けて？ (ほんとはママでしょ)

隆昭 (夏実の真意に気づかず) いやー、照れるな。

全体が笑いに包まれる

響、朝日、千晃話しながら登場(制服姿)。

ママ いらつしやませ。

朝日 あー、ほんとに疲れた！

響 今日の模試、チョーむずかった。

千晃 ねえ、自己採点どうだった？

響 私、まだ答え見てない。

朝日 私も。
響 千晃はどうだったのよ。
千晃 全然、だめ。特に数学が壊滅的。
響 私なんか、数学は白紙同然だわ。
朝日 いばらないで。
響 いばつてないわよ。

ママが接客

ママ ご注文、お決まりですか。
響 私、バナナジュース。
千晃 おこちゃまね。私はアイスマイルクティーにしよう。朝日は？
朝日 えー、ちよつと待つて。
千晃 はやくう。
朝日 じゃあ、私もバナナジュース。
響 あ、真似した。
ママ バナナジュース二つと、アイスマイルクティーですね。
響 千晃つて、壊滅的、とか言つてるくせに、いつもトップクラ
スなんだから。
千晃 そんなことないわ。この間は八番だったんだから。
響 それつて当てつけ？
朝日 いいわねえ、千晃、勉強できて。
朝日 朝日つて、何学部？
朝日 国際学部よ。できればフランス語なんかを、身に付けて留
学したいかな。
響 フランスかあ。ヨーロッパ行つてみたい。
朝日 そういう響は？
千晃 まだよくわかんない。まあ、そこそこの大学に入ればつて。
響 気楽ね。
千晃 受験なんて、まだ一年以上先よ。

ママ お待ちどおさま。
千晃 そんなこと言つたら、乗り遅れるわよ。
響 乗り遅れる？ 何に？
千晃 受験よ。先生は二年生の夏が勝負だつて、言つてるでしょ。
朝日 そんなにプレッシャーかけないで。ただでさえ、点数足りな
くて焦つてるんだから。
千晃 (カウンターの隅に明日香を見つけ) あれつ、前田さんじゃ
ない。

一斉に明日香を見る

響 どうして、こんなところに？
ママ お友達？
明日香 ……。
朝日 しばらく学校来なかつたけど？元気だった？
響 そうだつて？
朝日 響つたら気が付かなかつたの？
千晃 鈍感ね。
朝日 前田さん、影薄いから、仕方ないつて(笑)。
響 ねえ、響つたら。
朝日 うちの学校、アルバイトよかつたつて？
千晃 禁止に決まつてるじゃない。先生も勉強に差し支えるつて、
いつも言つてるでしょ。
朝日 何か事情があるかもしれないじゃない。
千晃 学校来ないで、アルバイトですかあ？気楽でいいですねー。
朝日 ねえ、やめて……。
ママ すみません、お客さま。ほかのお客様の迷惑になりますので、
少し静かにしていただけますか。
千晃 何この人？
響 全然、うるさくなんかしてないじゃん。

朝日 ねえ。

ママ これ以上、うるさくなさるんでしたら、お代は結構ですから、

お引き取りください。

千晃 気分悪い、行こう。

響 そうね。嫌味な店員ね。

立ち上がる三人

朝日 (明日香に) 前田さん、夏休み終わったら、学校来てね。

明日香 (あいまいにうなづく)

三人退場、ママが片付けを始める。明日香は背を向けている。

隆昭 君って、学校行ってなかったんだ。

明日香 (うなづく、勝手口から黙って出て行く)

隆昭 (背中に向かつて) どうして?

ママ (急いで、明日香のあとを追う)

夏実 (隆昭に近寄って) 明日香ちゃん、不登校かあ。

隆昭 何かあると思っていた。

夏実 手首にリストバンドつけたままだし……。

冬真 ああ、リストカット……。

夏実 つらかったんだね。大丈夫かしら。

隆昭 何が?

夏実 早まったことしないといけど……。

隆昭 今日の新聞にも高校生いじめを苦に飛び降りか? って、載

って……。

二人 先生!

夏実 なんかすごく心配になってきた。

冬真 ママはちゃんと追いついたかな。

夏実 だと、安心だけど……。

ママ、明日香を連れて正面から登場

ママ!

明日香ちゃん!

まあ、そこに座りなさいよ。

……。

ちよっと二人にしてくれる。

今日はちよっと早いけど店じまいよ。

アドリブで何か言いながら、お金を置いて退場

さてっと、何か飲まない?(間) 私は紅茶にしようかな、あ

も同じでいい?そこに座って。

(うなづく)

ママはカウンターのなかへ座った明日香に単サス、全体照明

暗くなる。

暗くなる。

国立の医学部?この成績では絶対無理だな。真剣に進路、考

え直したらどうだ。

ねえ、この間の模試の偏差値どれくらいだった?

前田さんって、まだ陸上部なの?ずいぶん余裕ね。まあ、私

には関係ないけど。

千晃って、全然勉強してないってわりに、いつもトップクラ

スなんだから。

今日も学校へ行かなかったのか。いつまでそうしているつ

もりだ?聞いているのか。俺はお前のためを思っ言ってる

んだぞ。

どんどん成績、下がっていくじゃない。中学の頃のあなたは

どこへ行ってしまったの?あなただけが、お母さんの希望

なの。

明日香 (頭を抱える明日香) もう、やめて……。

(明転) ママ、グラスを持ってきて座る

ママ どうぞ。(間) やっぱり、学校行ってなかったんだ。
ママ やっぱりって？
ママ だてに年取ってないわよ。

明日香 そうですか。
ママ 当たり前よ。ねえ、少しでいいからあなたのこと話してくれ
ママ る？どんな悩みでも口にするよ、意外に楽になるものよ。

明日香 はい……。私には、居場所がないんです。

ママ 居場所がない？学校に？

明日香 学校にも家にも。

ママ そっかあ。

明日香 親も先生も私を追い立てる、頑張れ、頑張れって。

ママ 頑張れかあ。

明日香 こんなに頑張っているのに、まだ足りないの？(遠くに向か
つて)

ママ がんばり地獄ね。(考えて) さっき、夢がないって言ってた
わよね。

明日香 はい。

ママ 先生も親も仲間も、みんな夢を持ってっていうけど、夢ってな
んだらうね。

明日香 ……。

ママ 隆昭さんの子供のころの夢って何だったと思う？

明日香 さあ？やっぱり小説家？

ママ 何言ってるの、小説家を目指す小学生って、なんかねえ。隆
昭さんは寿司屋になりたかったんだって。

明日香 寿司屋、ですか？

ママ その理由はね、毎日お寿司が食べられるからだった。隆昭さ

明日香 んお寿司が大好きなのよ。

明日香 そうなんですか。(間)

ママ ここに来る人たちって、みんないい人ですね。

明日香 ええ、気のいい人ばかりよ。
ママ 私のこともいつも気にかけてくれるし、こんな経験初めて
です。

明日香 なんて言ったらいいかわからないけど、あなたの居たいと
思ったところがあなたの居場所になるんじゃない。

ママ ……。
ママ 私がこの喫茶店を始めたのはね……。

隆昭登場、夜になっていく

ママ あの、今日はもう閉店で……。あら隆昭さん、どうしたの？

隆昭 お邪魔かな。

ママ いいえ、もう話は済んだわ。なんか用？

隆昭 いや、ちよつと大事なものを忘れちゃって。

ママ なあに。

隆昭 ああ、やっぱりここだった。

ママ それ何よ。

隆昭 アイデア帳。いつも持ち歩いている。

ママ へー。

明日香 お寿司屋さんかあ(笑)。

隆昭 何、お寿司屋さんって？

ママ 何でもないわ。で、そのメモ帳どうするの？

隆昭 それで、思いついたことをすぐメモるんだよ。

ママ そんなこと書いてるの？

隆昭 たとえば、歩いていてふと思いついたアイデアとか。
ママ ちよつと見せて。

隆昭 だめだよ、それは秘密。

ママ ふうん。(間)ところで、あれから一カ月、「先生」の小説はどうなったの。

隆昭 実は、あれから、バイトのほうに忙しくて、一ページも進んでないんだよね。

ママ あの時の意気込みはどうしたの？

隆昭 あの、あれさ、貧乏暇なしってやつ。

ママ ここにきて、油を売ってる暇はあるんだ。

隆昭 一日の疲れを癒すのがこの店。ここにいて、小説を書く英気養うのが一週間のルーティーン。

ママ それじゃ、小説を書く時間は生まれないわね。

隆昭 小説を書くというストレスの塊の中に突入するのには、並大抵のパワーでは足りないんだよ。

明日香 じゃあ、隆昭先生はどうして小説を書くかと思ってらっしゃるのですか。

ママ 鋭いわね。

隆昭 それはな、話せば長くなるが……。

ママ いいわよ。話してみて。

隆昭 高校生の頃だった。仲の良い四人の友人グループがあつたね。みんないつも一緒に、楽しかった。俺にとってはなんか世界のすべてのような感じだった。あの頃の俺の夢は天文学者になること。キャンプに行った時、星たちの孤独について話したりした。

明日香 谷川俊太郎みたい。

隆昭 さすがだね。

ママ それからどうなったの？

隆昭 ある時、グループの中で恋が芽生えて、あんなに強かった絆がしだいに崩れ始めた。

ママ もしかして、隆昭さん？

隆昭 いや俺じゃない。なんていうかな、絆が崩れていくときの、

喪失感っていうかな、その時の胸の苦しみ、今も思い出すた

ママ びよみがえってくる。そうだったの？

隆昭 それから、瞬間と永遠について考えた。星でさえ永遠の時間が刻めないなら、逆に瞬間を永遠につなぎとめることができるのではないかって。

明日香 瞬間を永遠に？

隆昭 そう、だから俺はそのことを小説にした。小説の書き方なんて全然わからなかったけど、せめて、何かの形になれば、失われた世界もどこかでもとにもどるんじゃないかって。

ママ で、その小説が入選したのよね。

隆昭 地元の小さな町の文芸祭の優秀賞だけどね。

明日香 すごいですね、優秀賞。

隆昭 小さな町の文芸祭だからたいしたことはない。

ママ 優秀賞は優秀賞よ。

隆昭 たしかに、小説をもっと書きたいと思ったのは、その賞もなかったから。ひよつとしたら俺には才能があるのかも、なんて思いも生まれてきたし……。

ママ だから、大学を出ても就職しないで、アルバイトをしながら小説を書いているとね、なんか自分が解放されるような気がする。

隆昭 どういうこと？

ママ 古い自分から解放されて、新しい自分に生まれ変わるよ

明日香 (つぶやくように) 新しい自分？

隆昭 でも、口で言うほど簡単じゃない。まだまだ道は長い。

ママ あら、こんな時間。(外を見て) すっかり暗くなった。もう

秋になるわね。

隆昭 夜道は危ないから、そろそろ帰ったほうがいいんじゃない。

ママ そうね。お疲れ様。

明日香 ありがとうございます。お疲れさまでした。
隆昭 長い間引き留めてごめん。気をつけて帰りな。

明日香退場

隆昭 なにかの役に立ったかな？
ママ 何が？

隆昭 俺の話。
ママ さあ、それは彼女が決めること。

(暗転)

【シーン四】

(明転) 明日香あわてて登場

明日香 遅刻してすみません。もうすぐ学校始まるし、それでお母さんとけんかして。

ママ お母さん何だって？

明日香 夏休みが終わったら絶対学校行けって。

ママ 行く気はないの？

明日香 この一カ月、バイトしながらいろいろ考えました。

ママ それで？

明日香 隆昭先生の話、聞いてたら、何か、そんなに焦ったり、自分を責めたりしなくてもいいのになって、思えるようになってきて……。

ママ ふうん。

明日香 ちよつと休学して、認定試験受けて、それから大学選べばいいのになって。

ママ 認定試験？

明日香 はい。そういう制度があるみたいです。

ママ そうなの、大変みたいだけど、あなたならできるわ。

明日香 でも、なかなかお母さんが納得してくれなくて。

ママ 誰でも、受け入れるのには時間がかかるものよ。あなたが選んだ道ならそれを進めばいい。

明日香 ありがとうございます。

ママ 少しは勇気が出てきたみたいね。

明日香 勇気？

ママ そう、生きる勇気。

明日香 どうして？

ママ 初めてこの店に来たとき、なになくしかけていたような気がしたから。

明日香 どうして、それを？

ママ 年の功よ。あなたより、ずっと長く生きているわ。

明日香 ……。

ママ また、話したくなったら、話してくれない。(間) 隆昭さんのように。

明日香 はい……。

ママ 人生、そんなには片が付かない。

隆昭登場

隆昭 こんにちは。

ママ いらつしやい。今日は遅いわね。

隆昭 昨日、話したら、なんか、意欲がわいてきて、今朝五時まで書いていた。ママ、いつもの。

ママ すごいじゃない。(カウンターへ)

明日香 昨日はありがとうございます。今日はバイトはないんですか？

隆昭 今日は遅番で、夕方五時から十時まで。

明日香 大変ですね。

隆昭 なあに、慣れてるよ。こう見えても体は丈夫なんだから。
ママ えー、意外、風が吹けば折れちゃいそう。

隆昭 それはひどい。

明日香 (くすくす)

隆昭 明日香ちゃんまで。

明日香 ところで、どんな小説なんですか。先生が書いていらっしやるの？

ママがカウンター越しにコーヒーを出す。

隆昭 簡単に言えば純愛ラブストーリー。

明日香 純愛ラブストーリー？もっと聞かせてください。

隆昭 些細なきっかけで思わず離婚してしまったけど、

実はお互いに心の底から愛し合っていた。そのことに気づいた二人は様々な障害を乗り越えて再び結ばれるって話。

ママ 耳にタコ。で、どれくらいできてるの？

隆昭 どれくらいかなあ。まあ、三分の一くらいかな。

ママ 先は長いわ。で、文学賞の締め切りは？

隆昭 たしか来月の末だったと思う。あと一カ月で完成させないと。

ママ 見通しはあるの？

隆昭 大丈夫。今度は絶対。

ママ ほんとに？また、今度だめだったら次回がある、なんて言うんじゃない？

隆昭 いいや、今回は違う。昨日は面白いように筆が進んだんだ。

朝日登場

ママ いらっしやい。……この間の……。

朝日 この間はごめんさい。(明日香に) 傷ついたでしょ。

明日香 ううん、気にしてないから。(明日香出てくる)

朝日 響も千晃も、心の中では気にしてるのよ。前田さんが学校来てないこと。

明日香 ありがとう。

朝日 一言ごめんさいが言いたくて……。

明日香 気にしてないって。

朝日 それから、夏休み終わったら、学校に来てね。

明日香 (微笑んで) ありがとう。

朝日 絶対だよ。みんな待ってるから。

明日香 (うなずく)。

朝日退場

ママ 真面目な子ね。

明日香 (うなずく)

隆昭 ところで、明日香ちゃん、君も小説書いてみたら？きつと才能あると思う。

ママ ささか、冗談言わないでください。

明日香 「隆昭先生」にも書けるんだから、大丈夫よ。

ママ、それはあんまりだよ。それはともかく、俺ももう若くないし、これが最後だと思ってるが、今年こそ本気で狙えるような気がする。(立ち上がる)

明日香 頑張ってるね。

ママ 頑張ってください。

明日香

隆昭退場

朝日退場

明日香 先生、頑張ってますね。

ママ (突然) ねえ、あなた、小説書いてみたら。ひよっとしたらいいものを書けるかも。

明日香 やめてくださいよ、ママまで隆昭先生みたい……。
ママ 隆昭さんが言ってたからってわけじゃないのよ。あなたにとつては藪から棒かもしれないけど、私はずっと感じてた。あなたの中には何か形にしたいものがあるのではないかって。そうすれば、あなたの心の整理もうまくできるかも。

明日香 でも、私、小説なんて書いたことないし……。作文昔から苦手だし。
ママ 誰でも最初は初心者よ。

明日香 そんな。

ママ (窓の外を見て) あつ、今日は夕焼けがきれいね。

明日香 ほんとですね。とつても、きれい。

ママ (独り言のように) こんな夕焼けを見ているとあの日を思い出す。
明日香 えっ？

ママ なんでもないわ。

明日香 でも、あの日って？

ママ (明日香には答えず) 水平線に沈む夕陽って見たことある。

明日香 (首を振る)

ママ 私は海の近くの喫茶店で、あなたと同じようにアルバイトをしていたわ。

明日香 (微妙な表情)

ママ 私も、いろいろあったけど、いつも、その夕陽に勇気をもたらしたわ。こうしてお店を経営してるのもあの頃のおかげね。

明日香 (ほっとした顔)

ママ そんなに焦らなくて大丈夫よ。大事なのは、今を精一杯生きること。

明日香 (うなずく、自分の気持ちをかみしめるように)

(暗転)

【シーン五】

(明転) 晩秋・隆昭が一人ホットコーヒーを飲んでいる。寂しげな様子である。
小春登場

小春 あれ、ママは？

隆昭 ……。

小春 明日香ちゃんもいないじゃない。どこに行ったの？

隆昭 さあ。

小春 ねえ、どうしたの？

隆昭 いや、別に。

明日香登場

小春 明日香ちゃん、どこへ行ってたの？

明日香 え、私は勝手口の片付けですけど……。

小春 ママは？

明日香 ちよつと、買い物に行ってます。

小春 なあんだ。(明日香に) ねえ、ねえ、先生、元氣ないじゃない、何かあったの？

隆昭 (ちらつと見て) ……。

明日香 (小春に近づいて、ひそひそと) この間の小説ダメだったみたいで。(小春かすかにうなずく)

隆昭 そうだよ。落選だよ。結局、俺なんて……。

小春 まあ、一回やそこらで、そんなに落ち込まなくても……。

隆昭 一回やそこらじゃない。

明日香 (小声で) 火に油……。

小春 怒鳴ってみても、始まらないでしょ。

隆昭 なんだよ。けんかでも売るつもりか。俺の思いなんか、お前にわからないだろ。

小春 ええ、わからないわよ。わかるわけないわよ。
隆昭 なんだと！

明日香 二人ともやめて！いい加減にして！

小春 ……明日香ちゃん……。

ママ登場

ママ たいだいま。どうしたの、大声出して。外まで聞こえたわよ。
明日香 ママ……。

ママ あんまりお店のイメージ崩さないでくれる。

隆昭 隆昭さんが、文学賞取れなかったことって、隆昭さん自身の問題じゃない。他の人には関係ない話。それをどうして、そんなふうみんなを巻き込もうとするの？

ママ 俺は別にそんなつもりじゃ……。

隆昭 でも結果として、こんな風にならざるを得ない。
ママ ……。

冬真登場

冬真 こんにちは。

ママ あつ、いらつしやい。

冬真 なんか、取り込み中のようですね。

明日香 いえ、大丈夫です。

ママ (隆昭に) チャンスははまだまだあるわよ。簡単にあきらめないで。

隆昭 気休めはやめてくれ。俺はこれに賭けていたんだ。

ママ またチャレンジすればいいじゃない。

隆昭 そう、これまで、なんどもチャレンジしてきた。そのたびに、次のチャンスをつて思ってきた。でも、そのたびに味わう挫折感……。

冬真 隆昭先生ちよつといいですか。

隆昭 (驚いて) え、ええっ……。

ママ なあに、改まつて……。

冬真 ぼくはサラリーマンだから、隆昭先生のような自由な生き方をうらやましく思います。まだまだ駆け出しだけど、でも

サラリーマンにはサラリーマンのやりがいみたいなものを感じています。新しく販売契約が取れたときとか、お客様に感謝されたときとか、なんか、こんな自分だけでよくやってるよとか、いろいろ感じます。

小春 冬真君、若いのにいいこというね。サラリーマンだったら、今回の取引、ダメだったから会社辞めますってわけにはい

小春 かないわよね。

冬真 はい……。

ママ 隆昭さんの夢と、サラリーマンの生活を同列で並べるのはちよつと……。

冬真 (うなずく。)

明日香 そりゃ、そうだけど、だったら、じくじく悩んでいないで、

小春 さつさと就職しちゃえば、まだ若いんだし、最近人手不足つて聞くし、就職口ならいくらでもあるんじゃない。

ママ また、乱暴な。

冬真 すみません、ちよつと誤解されているようなので、口を挟みますが、ぼくにはぼくの生き方があるし、先生には先生の生き方がある、先生のような生き方はぼくにはできないけれど、ぼくは隆昭先生のようにずっと夢を追い続ける生き方は尊敬します。

隆昭 ありがとう。

ママ 夢を追い続ける、かあ。……いいわね。

隆昭 でも、いい年して、無職じゃねえ……。ねえ、それじゃあ、就職して、サラリーマンやりながら小説にチャレンジするのは、どう？

小春

ママ

隆昭 それは無理。

小春 なんて？ だったら、何回チャレンジしても、そんなに落ち込むことないし、ねえ（みんなに同意を求める）

隆昭 無理だと言ったら、無理なんだ。

隆昭退場

ママ あーあ、いつちゃった。

小春 だって、あんまり女々しいからさ。

ママ あれだけ、自信作だって言ってたからね。

明日香 あの……。

ママ どうしたの？

明日香 実は……。

ママ ？

明日香 ちよつと見てもらいたいのが……。 （奥にある鞆から書類を取り出し、持ってくる）

明日香 これなんですけど、

冬真 何かの原稿みたいだね。

ママ ひよつとして。

明日香 そうなんです。 やつと書けたんです。

ママ すごいじゃない。

小春 何？ 何？

ママ いつか、明日香ちゃんに、あなたも自分のことを小説にしてみたらって、勧めてみたの。

明日香 小説なんて言えるほどのものではないですけど、私がこうして立ち直れたのは、このお店のおかげですし、だから、この

世界を何かの形にしておきたいなって思ってる。

ママ ぜひ、読ませてもらうわ。

冬真 ぼくも読ませてもらうっていいかな。

小春 私も読みたい。

明日香 ちよつと、恥ずかしいから……。

ママ 照れなくても大丈夫よ。 せつかく書いたのだから、みんなに読んでもらったら。

明日香 ええ、でも。

小春 そもそも、こんなところで出した以上、秘密にするのは無理よ。

冬真 そうだよ。

明日香 ……。

ママ タイトルは、つと、…… 「喫茶店『銀杏』」。 なにこれ、この

店の名前じゃない。

明日香 気の利いたの思いつかなくて。

小春 問題は中身よ。

ママ あんまり、プレッシャーかけないで。

冬真 そつえば、隆昭先生の小説って、読んだことありませんね。

小春 そうそう、いろいろでかいこという割にはね。

ママ 今回の自信作も、いつ完成して、いつ応募したのかもわからないわね。

小春 実はあんまり自信がなかったんじゃない。

冬真 そんな……。

明日香 私、一度読んでみたいんです。

ママ 昔はよく読ませてって言ってたんだけど、いつも何だかんだと言って、結局見せてもらえなかったわ。

小春 ママにも？

ママ 何考えているのやら……。

（暗転）

【シーン六】

数日後 夏実と冬真がテーブル席でおしゃべりしている。
カウンターの中には明日香とママ

隆昭登場、スーツ姿

隆昭 おはよう。

ママ 今朝は早いわね。

明日香 どうしたんですか、その恰好？

隆昭 似合ってる？

隆昭 (冬真たちに近づいて) どう？

夏実 あれえ、どうしたんですか？

冬真 今日は決まってるじゃありませんか？

隆昭 実はこれから面接に行くんだ。

全員 面接！

ママ 何の面接？

明日香 小説家が面接なんて、聞いたことがないです。

隆昭 実はこの間、ママから明日香ちゃんの小説読ませてもらっ

てね。それで、決心がついたんだ。

ママ 何の決心？

隆昭 (冬真に) 今日は仕事は？

冬真 今日は得意先に朝一番で直行だから、ちょっと遅めでいい

んです。

夏実 私は毎朝モーニング食べてます。隆昭先生は絶対寝てる時

間ですね。

冬真 じゃあ、そろそろ行きます。

明日香 行つてらっしゃい。がんばってくださいね。

夏実 私もそろそろ仕事に行こうかな。

ママ がんばってね。

夏実、冬真退場

ママ (隆昭に) ねえ、何の決心なの？

隆昭 やっぱ、自分には限界がある。それがわかった。(間)じ

やあ、行ってくる。(退場)

ママ 行つてらっしゃい。

明日香 どこへいったのですか？

ママ さあ……。

明日香 とところで、私の書いたの、隆昭先生にも見せたのですか？

ママ 見せたわよ。どうして。

明日香 だって。

ママ よく書けてたじゃない。初めてにしてはすごいわよ。ひょつ

としたらあなたには才能があるかもって思ってたね。

明日香 そんな、私なんか……。

フェードアウト・ホリの中に、次第に夕暮れ いつの間にか

小春が座っている。

(明転)

小春 ごちそうさま。そろそろ、帰るわ。うちも店じまいしないと。

ママ 相変わらず、花屋さんって、うらやましいわ。

小春 そうでもないわよ。私の仕事は店をしめてから。

小春退場・入れ替わるように隆昭登場

隆昭 こんにちは。

ママ お帰り、面接どうだった？

隆昭 ばっちりだよ。(間)就職が決まったんだ。

ママ おめでとう。

明日香 就職？今日は会社の面接だったんですか。

隆昭 そうだよ。

明日香 ママも知っていたんですか？

ママ うすうすとね。今朝の様子見ていたら、言わなくても想像つくじゃない。

明日香 そうなんですか。

隆昭 それはね、人にはやっぱり限界があるってこと。

ママ 限界？

明日香 何の限界ですか？

隆昭 俺の才能、だよ。

明日香 才能？

隆昭 そう、才能。やっぱり、田舎の優秀賞。そんなレベルに、過ぎなかった。

ママ 何言ってるの。何度でもチャレンジすればいい。

明日香 そうですよ。私たち、ずっと応援してますから。(間)

隆昭 やっぱり、今回が最後の一回だったように思う。俺にとつて、小説を書くことは自分を保ち続ける唯一の方法だった気がする。

ママ 隆昭さん……。

隆昭 でも、もう大丈夫。もうとらわれなくて大丈夫。明日香ちゃん、それを教えてくれたのが君の小説。

明日香 そんな……。

ママ (明日香に) よかったわね。

明日香 ありがとうございます。

隆昭 君が来てくれてよかったよ。ありがとうございます。

明日香 そんな……。

隆昭 本当にありがとう。

隆昭退場

ママ よかった。これで隆昭さんも落ち着いたわね。あとはお嫁さんかあ。

明日香 本当によかったんでしょうか。

ママ 何が？

明日香 隆昭先生が小説あきらめたのは、私のせいじゃないかって

ママ

……。

何言ってるの、「隆昭先生」も言ってたでしょ、この小説が最後の一回だったって。あなたの書いたのはきつかけにすぎないの。そして、隆昭さんもきつかけを待ってたのよ。(間)

明日香 あっ、今日は、夕焼けがきれいですね。

ママ 夕焼けって希望につながっているって思わない？

明日香 希望？

ママ そう、明日への希望。

明日香 ……。

人は、どんなに絶望の淵にあっても、何かに希望を見出そうとする。

明日香 「最後には希望が残った？」

ママ そう、パンドラの箱。隆昭さんも、たぶん新たな希望のために、今の行き詰まりから自由になることが必要だった。

明日香 (うなずく) 私も……。

今の自分に区切りをつけて、新たな一歩を踏み出すこと、それが明日を創るということよ。

明日香 明日には希望があるんですね。

ママ 当たり前よ、最後には希望が残るの。希望がある限り、私たちは前を向いて生きていける。

明日香 (うなずく)

夕陽を見る二人

幕

幕

幕

幕

幕

幕

幕

幕

幕

幕

幕

幕